

2021年8月29日（日）／説教者：國分美生

説教：「食事会への招き」

聖書：ルカによる福音書14：15～24

「大宴会」はユダヤ人にとって一つのキーワードでした。それは、イスラエルの古代から語られてきた「神による豊かな食卓への招き」を聞く人に思い起こさせました。神が用意して与えてくださる食事は「神の国」をあらわし、食事の席に着くことは永遠に「救われる」ことに結びついていったと考えられます。このたとえ話は、イエスが誰とともに・どこに立って神の国を宣べ伝えていたか、それをはっきり示しています。

たとえ話の主人は最初に食事会への招待をゲストとなる人たちに知らせて承諾を受け取りましたが、客はみんなこぞって土壇場でキャンセルしました。しかも、その時代の人々が聞けば誰にでもわかる嘘までついて。招待客から侮辱されたことを知った主人は、僕に、町の広場や路地へ行って、貧しい人、体・目・足の不自由な人を連れてきなさいと命じました。彼らは当時の社会の中で言ってみれば「失格者」と烙印を押されていた人々です。目や足の不自由な人は神殿の中に入ることが出来ませんでした。経済的・健康の理由から律法を守れず、捧げものが出来ない人は「罪びと」とみなされ神の国の祝宴に入れてもらえないとされていた時代でした。

神の国の救いの食事会への招きにふさわしいように見えた人々が、結局は食事を味わうことが出来ず、それはむしろ社会からはじき出されていた人々のものであった、というこのたとえ話のオチは、イエスのその立ち位置をはっきり表すものです。誰一人もれなく神の国に招かれているということを宣べ伝える時、イエスは常に、低く小さくされた人々へこそ特別なまなざしを向けていました。

「罪びと」とされ社会の底辺に生きる人々がみな、善良とは限りません。差別や抑圧を受ける中で、屈折してしまったり、自分も他人も信頼できなくなったり、抑圧者の価値観に染まってしまうこともあると思います。イエスは人々のそういう面に差別や抑圧社会の大きな傷跡を見たのかもしれませんが。そしてその苦しみを共に引き受けながら、彼らと一緒に食事をしたのかもしれませんが。

だれ一人取り残されることなく招かれている神の国の食事会をイメージするとき、それをどこに立ってイエスとともに宣べ伝えていくか、私たち教会は深く考えさせられます。（國分美生）